

# 御挨拶

中村 歌右衛門

皆様、本日はお暑い中をわざわざお越し下さいまして誠に有難うございます。

「葉月会」も今年は第五回を開催いたすことになりました。これもひとえに皆様方の温かいご支援によりますものと深く感謝いたしております。

「葉月会」は、中堅、若手俳優の技芸の発表の場であるとともに、歌舞伎邦楽の若手の勉強発表もさかんになってきまして、まことに喜ばしいことと存じます。

第二回から、お芝居の発表に力を入れましたところ、ご好評をいただきまして、出演者一同、たいへんに張りきっております。

今回までに「どんどろ大師」「朝顔日記」「身売りのかさね」といずれも義大夫狂言の大作を稽古して発表してまいりました。

今年は、歌舞伎狂言の中でも屈指の大作である「四谷怪談」に取組むことになりました。まことにむづかしい大物ではありますが、出演者一同の決意のほどにめんじてなにとぞ稽古の成果をみてやっして下さいますようお願い申し上げます。

加えて、邦楽若手の勉強を二番の舞踊で発表させて頂き、併せてご覧下さいますようお願い申し上げます。いずれにしても、未熟者ぞろいでございますので、さぞかしお目まだるき点多々あると存じます。なにとぞ温かいご声援のほどをお願い申し上げます。

なお、毎夏の開催にあたり、惜し身なくお力添え下さいます指導の諸先輩はじめ関係者各位、殊に、国立劇場の皆さんには多大のご協力をいただき、本当にありがたく、この機会に厚く御礼申し上げます。

(伝統歌舞伎保存会会長)

昭和六十一年八月

## 第五回 葉月会 国立劇場大劇場

### 歌舞伎青年俳優 研修発表会

### 歌舞伎邦楽若手

鶴屋 南北 作  
中村 歌右衛門 指導

## 一 東海道四谷怪談

二幕四場

序幕

四谷町伊右衛門浪宅の場

伊藤喜兵衛内の場

元の伊右衛門浪宅の場

二幕目

砂村隠亡堀の場

尾上菊之丞 指導

上 藤

娘

長唄子連中

藤間勲十郎 振付

下 羽

衣

常磐津連中

長唄子連中

加賀屋 松本幸太 松本幸太 中村時太 澤村大蔵 尾上梅之丞 中川八之丞 市川八百穂 松本錦次 尾上辰夫 坂東三平 坂東三平 片岡欣弥 中村東之助 市川喜三郎 尾上扇三郎 尾上辰夫 松本幸次郎 市川左衛門 松本幸右衛門 長唄子連中 鳴物津連中 常磐津連中 指導 芳村五郎 鳥羽屋里長 田中傳左衛門

八月十九日(火)

昼ノ部 十二時三十分

夜ノ部 五時

開演

主催 社団法人 国

後援 伝統歌舞伎保存会 立劇場

鶴屋南北作  
中村歌右衛門指導

# 東海道四谷怪談

## 一幕四場

### 序幕

四谷町伊右衛門浪宅の場  
伊藤喜兵衛内の場  
元伊右衛門浪宅の場

一幕目 砂村隠亡堀の場

民谷女房	お岩	加賀屋	歌江
民谷伊右衛門		松本	幸右衛門
伊藤喜兵衛		片岡	欣弥
秋山長兵衛		市川	喜三郎
関口官藏		中村	吉次郎
中間伴		松本	錦一郎
中		尾上	扇三郎
中		坂東	三平
中		坂東	玉助
女		市川	八之丞
女		中村	扇之丞
孫娘	お梅	中村	扇之丞
乳母	おまき	尾上	梅之助
按摩宅	悦	澤村	大助
利倉屋茂	助	松本	幸次郎
伊藤後家	お弓	市川	左郎
小佛	小平	加賀屋	歌江

小平女房	お花	加賀屋	歌江
民谷伊右衛門		松本	幸右衛門
直助権兵衛		松本	幸太郎
佐藤与茂七		尾上	辰夫
秋山長兵衛		市川	喜三郎
乳母おまき		尾上	梅之助
伊藤後家お弓		市川	左升
母おくま		松本	幸雀
小平の霊		加賀屋	歌江
お岩の霊		加賀屋	歌江

### ご案内

「四谷怪談」を全幕上演するとすると、五幕十二場という大規模なもので、勉強会ではとても全容をお目にかかることはで

きない。  
今回は、一度中間にあたる部分の、浪宅から始まることになる。なんとといっても「お岩さま」で有名な狂言であるが、浪宅・喜兵衛内・浪宅の三場を通じて、岩という女のあまりのいじ

らしさに涙なき人はないと思われるほど、じつにかわいそうな女性である。そのしいたげられた純情のうらがえしが、すさまじき怨念となるのであろうが、「四谷怪談」の永遠性は、この心理劇の現代性にあると思わざるをえない。「生世話(き

ぜわ)狂言」とよばれる所以であろう。  
加賀屋歌江がどこまで岩の心理表現に迫るか、今回のみどころの重要なポイントである。

### 作品

みなさますでにご存知の鶴屋南北の代表作で、今から一六〇年前に二代目菊五郎の岩で初演された。文政八年(一八二五年)の中村座、古いようであるが、明治のわずか四十年余り以前のこと、近代の足音は次第に近づいてきた時代である。怪談物を得意とした尾上家の芸統はこの「四谷怪談」で確固としたものとなったようで、このとき菊五郎は、小平と与茂七を早替りでつとめた。以来、小平は多くのお岩役者がほとんど替ってつとめており、今回も歌江は小平を早替りで演じる。

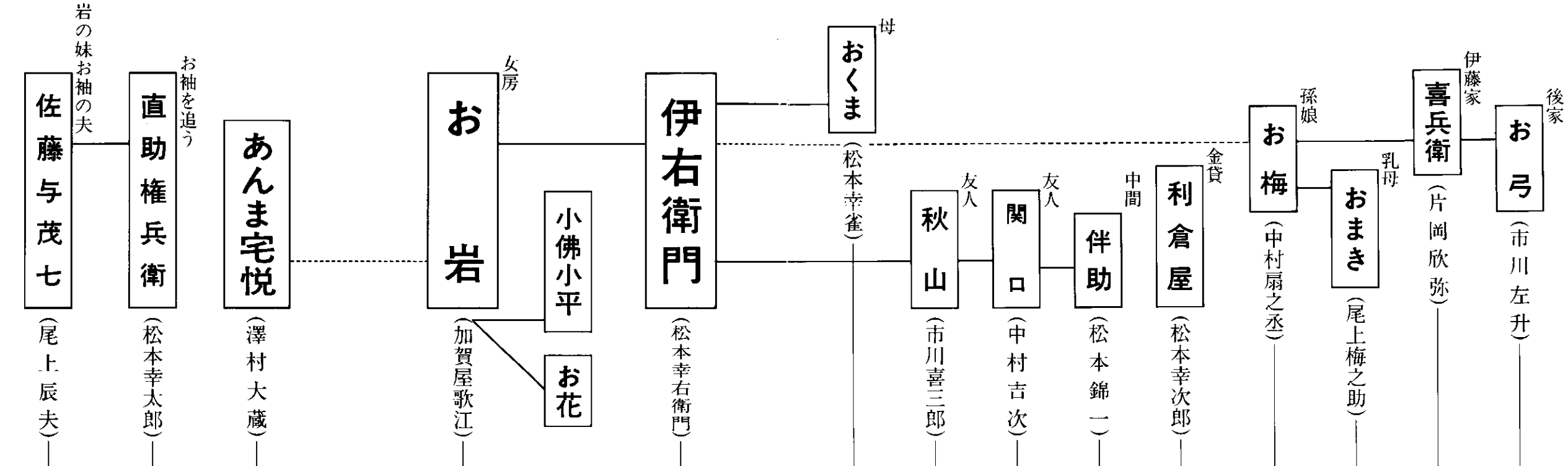
南北は七十二才のときこの作品を書きおろし、人気狂言の「忠臣蔵」と併演した奇抜な企画で大当たりをとった。伊右衛門が塩谷の浪人であり、高家の家臣伊藤喜兵衛と隣り住まい、そのお梅とのいきさつから岩の運命が激変する設定のうまさば、多くの「外伝」ものに匹敵する「忠臣蔵」狂言でさえある。しかし、岩の怨念を軸とし、怨霊変化を前面に押し出した近代劇術は単なるお化け物に終らせず、一ト皮・ト皮、岩の心をはぎとつてみせてゆく浪宅の場面は、「人形の家」のノラを思わせる心理劇である。

### 芝居とモデルと

お岩さまは実在したのだろうか。いちばん素朴な興味にいつも答えてくれるのは結局?なのであるが、四ッ谷という地名が現代の東京でも中心街にあるだけに、「四谷怪談」は永遠の魅力である。四ッ谷三丁目から折れて左門町にでると「四谷稲荷」がひっそりとただずまひしている。表通りの喧騒に比して不気味な静けさを見ながらしているお稲荷さまは、占風な旗のぼりの風情とともに、ぞっくりとする風景で、ここに同心役で住んでいた山宮又左衛門の娘が「岩」とよばれて

いたという。たいへんな嫉妬ぶかい女で、結局そのために身を滅ぼし、怨念にまといつかれた夫は終生苦しまされたと巷説があり、これを小耳にはさんでいた作者に「怪談」ものの暗示を与えていたのであろう。「四谷怪談」はこうして生まれ、ということになるのだが、小佛小平は木幡小平次という別狂言の再生ともいわれ、直助権兵衛は、直助と権兵衛という二人の重罪人が同じ日に品川ではりつけの刑に処せられた情報?のシナリオ化とも伝えられるなど、有名狂言にかかわるモデル論が賑やかなのは今も昔も変わらぬ噂百科にすぎないらしい。結局、南北の鬼才をたしかめて終るのが常である。

# 『四谷怪談』 登場人物・配役スナップ



市川左団次一門。「葉月会」の出演は「どんどろ大師」の妙林でベテランの味をみせた。久しぶりの出演で上品な後家お弓役の実力は隠亡堀でみられる。他に「羽衣」海女に出演。

葉月会には初めての出演。松島屋系にあり、今日までに前進座の舞台歴を持つ。地味な存在でなじみがないが喜兵衛をつとめる実力者、年令も40才に届かないのにふけ役をこなす。

尾上梅幸一門。昨夏の「汐汲」でおなじみ、今回は「藤娘」を披露する。今年は当り年でできる四月芸術劇場公演の「トロイアの女達」でヘレネに特別出演、芸域の広い所を見せた。

中村扇雀一門。可憐な舞台をかわれてお梅役。舞踊の力もあり活躍が期待される一人。37年生まれ。父君は前進座演出家高瀬精一郎氏。好物にケーキと答える一面をご紹介。

松本幸四郎一門。葉月会初出演。数少ない大正生まれで本公演でも脇役の実力をみせてきたこと数々、今回は恰好の利倉屋に出演して脇をかためることになった。洋蘭を楽しむ趣味人。

恵まれた長身ですぐ覚えられ易いのが利点。今回も小佛小平をとらえて花道から登場。中間(ちゅうげん)とはいいいながら伴助という役は生世話の味がある。試金石の二役。

「四谷怪談」が「忠臣蔵」の世界と重なり合うのがこの官蔵と秋山長兵衛の役どころ。浪人暮しを漂わし、伊右衛門をいつしか浮きぼりにしていくうまさ。中村吉右衛門一門の若手。

市川猿之助一門。初参加の葉月会も間口が広がった。早大卒、前進座養成所卒、51・7月初舞台、26才になっていた。演技派の秋山長兵衛はみどころ、勉強会ならではの楽しみである。

夏の巡業で、「引窓」の母親を演じたベテラン。葉月会では、「釣女」の人名を演じた広さも。隠亡堀のおくま、「羽衣」の海女と遠慮ぶかけの助演には次回の活躍がまたれる。

長い間蓄積されてきたものが光り始めた幸右衛門さんの舞台が注目されてきた。葉月会の当初から活躍のたて者、実事よく、老けよく、踊りが達者の実力は、釣女、朝顔日記、与右衛門、三人生酔、と多種多様に発揮された。勉強会制作の苦労を忘れさせてくれるこの人、今回の伊右衛門はいかに。

「四谷怪談」上演の許しを得てから、「お岩さま」と歌江さんの「共同生活」が始まった。役づくりは土をこねる所から始まる陶工にも似ている。四六時中、頭から離れない岩という女性の事を思い続けてしまう苦しさは想像以上の事であったらしい。らしい、というのには、身近な我々も理解できず、ハッと気づいた時はげっそりとやせてドクターストップがかかった時であったからだ。「8キロの減量は無理でした」と恥かしい素ぶりの奥にいつもと違う決意をこらした。これこそ「四谷」のすごさか……。一日、師匠の歌右衛門さんに特別けいこをつけて貰い夜眠れるようになった。岩の気持を一枚一枚はぐように習って、それで納得して、さすがに師匠は違いますが、さすがです。と語る歌江さん。はじめて、明るい顔になって、ホッといたしました。

澤村田之助一門。おなじみの大蔵さんがあんま宅悦を演じる。「四谷怪談」はいつも宅悦がもうける、といわれるくらい、もうけ役であり、仕どころの多い役であり、難かしい役である。じっくりと拝見しようという大役。

松本幸四郎一門。注目の一役、直助権兵衛は誰が演じるのか？ その解答がこの人。興味ふかい舞台である。戦中派の一人、戦後の東宝時代に「七段目」の千崎弥五郎で名題披露、着実な歩みを続けている中堅。楽しみな観かきみられる。

歌舞伎会の「御所五郎蔵」で五郎蔵を演じた舞台は今冬の話題であった。尾上辰之助一門の世話の意気がよく、年令よく、働きたさき。佐藤与茂七は柄ではありません、と遠慮の一言、隠亡堀だけとわかって、やらしていただきまーす。とニッコリ。

尾上 菊之丞 指導

# 藤 娘 長唄囃子連中

藤 娘 尾上 梅之助

津の国の 浪花の春は夢なれや……

暗転の舞台から長唄の置唄がきこえてくる有名な場面です。まっくらな客席にいてドキドキと胸のたか鳴る一瞬。パッと目もくらむような明るい舞台の中央には、見上げるような藤の大木、美しい藤の花房があふれんばかりに垂れひらき、花、花、花の見事な舞台です。

その根方に、可愛い藤娘が、塗り等をかぶり、藤の枝をかついで、スラリと立っている。

なんと素晴らしい効果。この美しさ。しばらくは、演奏と舞踊に見入ります。

人目せき笠 塗等しやんと、振りかかげたる一ト枝は、紫ふかき水道の水に、染めて嬉しき山縁の色のいとしかいて藤の花……

絵からねけてたような美しさとはこんなことを云うのでしよう。それもその筈、むかしの人は、浮世絵の主人公が絵からぬけだして踊りでしたら、こんなおもしろいこととはない、としゃれっ気いっばいの江戸時代、驚くほど

藤 間 勘十郎 振付

## 羽 衣

常磐 津連中  
長唄囃子連中

天津乙女	加賀屋 歌 江
漁師伯了	松 本 幸右衛門
海 女	松 本 幸 雀
海 女	市 川 左 升

春の海原気も晴れ渡り眺め吉野の花よりまさる富士の高嶺に積る雪

漁師伯了は、ふと海辺の松の枝に羽衣の掛っているのを見つける。けれど伯了には、この羽衣が何であるか判らない。

伯了がそれを持って去ろうとする。

松風の音なふ声も面はゆく 宮居のかけを立ち出ずる姿妙なる天乙女 見る目で洩れぬ浦人が塩焼く浜の朝烟りと、そこへ天女が現われ呼びとめる。

その衣は羽衣といって 下界の人の物でないから返して下さいと願う。

伯了は取られまいとするので、乙女は取らんとして二人の振りとなる。

雲井に遊ぶ天人の 正しき身には神掛けて誠の外は岩浪の

の着想でした。

題材は、大津絵。「藤かつぎ娘」「座頭」「槍持奴」「鬼の念佛」などの風俗画で、近江（おうみ）の国にさかんな平民の戯画でした。後に、これらの大津絵から、五変化所作事を世に贈ったのが、文政年間（1819-1828）の関三郎という役者で、「藤娘」「座頭」「天神」「奴」「船頭」の五つの舞踊にまとめました。

中でも「藤娘」は、傑作のひとつ、特に近代に入って六代目尾上菊五郎が手がけ、その伝統をうけつぐ尾上梅幸の「藤娘」は極め付の舞踊で、みなさまご存知の美しさです。

今回、弟子の尾上梅之助が、とくに許されて師匠の得意芸を学ぶ機会を得、尾上流家元の菊之丞師に特訓をうけました。

梅之助、念願の「藤娘」であります。

歴史的な先行芸術であった貴族画に対する浮世風俗画の大津絵は、丁度、能に対する歌舞伎、和歌に対する狂歌川柳に似ていた。漸新だが下俗、二次元から三次元にとび出したような新風が大津絵にあった。

**大津絵**

舞台の関係者がこの新機運に目覚めない筈はなく、やがて絵の中の人物が踊りだして所作事となつて、羨ましい創作の時代で、現代には夢のような新風が江戸時代にはふいていたのである。

寄するをいとい返る浜

伯了がどうしても返さないで乙女は その羽衣が戻らずば自分は大界との道が絶え

今今はさながら天人も羽なき鳥の放し飼  
上らんとすれば翅なく  
地に又住めば下界なり

と 乙女くどき模様よろしきあつて納まる。  
伯了は 乙女のそのありさまにそぞろ哀れをおぼえ 返すことになるが その代りに天上で舞うことを所望する。

東遊びのみやびなる 是ぞ舞台の初めなるらん  
乙女は衣をきなしつつ けいしよの舞の袖

春かすみ たなびきにけり久方の月の桂の花や咲く  
やがて 舞の内に天女は次第に天上へ舞い昇る。

### (二)案内

謡曲の「羽衣」から脚色した舞踊で、五代目尾上菊五郎が初演。

三保の松原、天人の舞、常磐津、長唄の名曲が織りなす優雅な日本の粋が舞台いっぱいになりひろげられる。

加えて藤間宗家の振付をえて、歌江・幸右衛門が息の合った天女と漁師のやりとりを見せ、いつも助演にまわって踊りに達者な地力をみせる幸雀、左升の二人がいろいろを添える。

尚、「羽衣」は昭和27年7月の歌舞伎座で歌右衛門の天女、故人寿海の漁師で演ぜられた名舞台があり、このとき、歌右衛門の天女が宙乗りを演じてたいへんな評判となった。





「汐汲」 刈藻 = 梅之助



「薫樹累物語」 埴生村身売の場  
かさね = 歌江 与右衛門 = 幸右衛門

与右衛門 = 幸右衛門 かさね = 歌江



「薫樹累物語」 絹川堤土橋の場  
金五郎 = 大蔵 与右衛門 = 幸右衛門 重三郎 = 仲助

60. 8. 17

年に一回、八月に研修  
発表をする「葉月会」は、  
昨夏の第四回で「薫樹累  
物語」(二幕)を上演、舞  
踊の三本立て「草摺引」  
「三人生酔」「汐汲」も併て  
上演いたしました。

ご覧になられた皆様には、  
思い出のアルバムとして、  
又ご覧になれなかつた  
方々には、ご想像のしおりに、  
この舞台記録写真を  
お届けします。

思い出の舞台  
昨年の舞台から  
第四回  
葉月会  
思い出の舞台



「草摺引」 舞鶴 = 歌次 曾我五郎 = 吉三郎



「三人生酔」  
喜代三 = 仲助 おぎん = 歌江 駒吉 = 幸右衛門

(撮影 石井雅子)



